

# アピールの場全日本大学野球選手権中止

# プロの夢 勝負は秋

## 八学大・中道投手「地元」に希望を

### コロナ禍を 生きる

ルポ・あおもり



今年秋のドラフト指名を待つ八戸学院大硬式野球部の中道さん。投球練習に気合が入る13日夕、八戸市美保野

「パーン」  
13日午後5時すぎ、八戸市美保野の八戸学院大学硬式野球部グラウンド。十和田市出身の中道佑哉さん(4年)が左腕をムチのようにしならせ、ボールを投げた。乾いた音を立てて、フルベイン捕手のミットに収まる。プロ球団からドラフト

指名を待つ最速145キロのサウスポーは満足そうに笑った。  
野球との出会いが北園小学校2年。テレビ中継で目にした選手たちのプレーにくぎ付けとなり、クラブに入った。以来、投手一筋。三本木中学校時代は種市篤陣投手(千葉ロッテ)と投

げ合ったこともあった。だが、進学した野辺地西高校時代は腰痛などけがに苦しみ、力を発揮できなかった。そんな時にアドバンスをくれたのは、同じ学校法人が経営する八戸学院大の正村公弘監督(56)だった。  
「真上からではなく、肘を下げてみる」。助言を受けて横手に近いスリークォーター気味に投げ方を変えたところ、制球力が上がった。大学進学後、素質は花開く。2年で直球の速さは140キロを優に超え、3年では大学加盟の北東北大学野球リーグでベストナインに選ばれた。秋山翔吾外野手(レッズ、元西武)、高橋優貴投手(巨人)らプロ選手9人を輩出した大学の主力として注目を浴び、「憧れの世界が近づいてきた」と自信が芽生えていった。

「4年生の今年は、野球人生集大成のシーズン」。そう思っていたところ、新型コロナウイルスの感染拡大で潮目が変わった。春季リーグ戦は延期となり、開催は不透明な状況。その先にあった6月の全日本選手権も、中止が決まった。

地方大学の選手にとって全日本選手権は自分の力量を関係者にアピールする絶好の機会。高校時代に輝かしい成績を残した「エリート」擁する有名大学相手に無名の中道さんが結果を出せば、多くのスカウトに好印象を与えられる。

昨年の全日本選手権では九回、悪夢のサヨナラ打を浴びた。「悔しさを晴らす」と一冬耐え、投げ込みもしてきた。それなのに…。シヨックは大きかった。それでもプロは幼い頃からの夢。立ち止まるわけにはいかない。新型コロナウイルスによる感染被害は広がり、他の競技では病に倒れ命を落とす選手もいた。健康な体で野球をやれるだけでも幸せ、と気持ちを切り替えた。「自分を高めて、さらに成長する時間に充てなければ。光はきっと見えてくる」。今は力を養い活躍の機会を待つ雌伏の時」と捉

え、8月下旬からの秋季リーグ戦の開催を信じ、前向きに体を動かす。  
身長182センチ、体重は75キロ。まだ線は細いが「伸びしろは十分」。正村監督は、左の強打者が多いプロでは救援を含めて起用の場面は多いとみる。中道さんは力を込めて言う。「新型コロナウイルスによる自粛ムードはまだまだ続くだろう。どこか沈んでいる地元を活気づけた

い。十和田市初のプロ選手になって、地元の小中学生たちに大きな希望を与えられたら」  
\*好きな言葉は造語で「勝利一笑」。憧れのマウンドで、勝って喜びに浸る姿が目につくが、そのためにも新型コロナウイルスが収束し、スポーツを楽しめる世の中が早く戻ってほしいと心から願っている。(松田啓志)  
※随時掲載します。

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです